

江戸城が北条氏綱の拠点とされたことは、古河公方派の千葉介勝胤にしてみれば面白くない話である。

かつて小弓奪回のために支援を求めたとき、氏綱はそれを拒否した。その一件もあり、正直なところ、勝胤は北条氏綱を冷ややかに見ていた。

そんな風聞を察知したのか、北条氏綱は江戸陥落後から、足繁く本佐倉城へと、機嫌伺いの使者を立てていた。

その真意は、勝胤よりも次代の棟梁となる昌胤の籠絡にあった。

若い昌胤は物事の真意を識ることなく、氏綱に根拠なき好感を傾けていく。

江戸城を好ましき味方と刷り込ませるくらい、老獪な氏綱には造作もないことであった。

このことで昌胤は氏綱に傾倒し、千葉家中には、次第に内紛の芽が育まれていった。

江戸城の城将として詰めていたのが、太田道灌の孫にあたる、太田六郎左衛門尉資高である。

道灌は城の縄張りにも才を発揮した。江戸城は道灌により、難攻の拠点とされた名城である。

道灌の死後、太田氏は岩附・江戸と、ふたつの派に分裂した。

岩附太田氏は、太田道灌の甥で養子にあたる源六郎資忠の血統である。道灌暗殺後も扇谷上杉家に仕えて、その家名を守り続けた。

片や江戸太田氏は実子・源六郎資康の血統。こちらは道灌暗殺後、主家に憤り、扇谷を見限り山内上杉家に仕えた。

山内・扇谷両上杉家が和睦したとき、江戸太田資高は改めて江戸城を正式に任せられ、旧職に復帰した。

が、人の心に刻まれた二代に渡る恨みというもの、それは、そう簡単に消え去ることはないものである。

太田資高はどこかで怨みを覚えていた。

太田道灌を暗殺してまで保身を選ぶ扇谷上杉家を、心から許せることが出来ようか。その意固地さを洞察する北条氏綱は、ちよつとしたき

っかけさえあれば、簡単に和が破れることを承知していた。

武蔵国の豪族・毛呂佐渡守顕重を調略したとき、氏綱は太田資高へも誘いを仕掛けた。きつかけなど、何でもいい。

扇谷上杉朝興は道灌の負い目があるから江戸太田氏をいつか攻めるとでも焚き付ければ、疑心暗鬼な太田資高は簡単に転ぶのである。

こうして北条氏綱が武蔵進出の行動を起こすと、太田資高もまた、これに内応して江戸城を開いたのだ。

氏綱が望む武蔵国の拠点が、労せずして手に入る。それが天下の堅城で知られる江戸城なのだ。

このことで氏綱は直接の戦闘を行う必要はなかった。

扇谷上杉家へ叛いた太田資高と、江戸城を追われて河越へ落ちた扇谷上杉朝興同士が、勝手に潰し合うだけなのだ。

なんと、高度な戦術だろう。これが、北条氏綱の凄味であった。

以後、江戸城は上杉家へ属すことはなかった。北条氏綱は太田資高の身柄を巧みに扱った。功績を讃えつつも、資高を江戸城香月亭に留めたのは、実権を奪う算段である。

こうして江戸城に直臣を送り込み、本丸・二の丸に配置した。

太田資高は城を保ったが、それは城主としての期待とは別物となった。そのささやかな不満は、やがて、火のように広がっていくのである。

当時の江戸は、太日川（現・江戸川）や利根川といった大河が注ぎ込む入り江の港湾であった。江戸湾の奥に位置するこの地は海上交通や河川交通の要であり、物流による関税を徴収するうえで大事な所だったのである。

氏綱は江戸という湊を重要視した。

それは廻船による貿易拠点であるとともに、里見を睨んだ水軍拠点という意味である。これが房総との利益の対立につながるのは、自明の理だった。

古河公方派である千葉介勝胤が江戸のことで不服を募らせるのは、つまりはそういうことなのである。

大永五年（二五二五）二月四日、北条氏綱は江戸城を足掛かりとして、岩附城への攻撃のため出陣した。

氏綱の恐ろしいところは、攻め取った地を搾取の場とせず、新しい拠点として認めるところであった。降伏した将兵を生かして用い、その伝手を以て近隣を調略させていた。

岩附城は扇谷上杉朝興の家宰・太田美濃守資頼が守っていた。太田道灌の孫にあたる。こちらの系統は主家を恨むことなく忠勤を尽くしていた。

若くして入道となった資頼には、不気味な貫禄があった。まともに戦っては被害を甚大と為すような、不思議な予感さえあった。

ゆえに氏綱は正攻法を用いていない。

「在地の衆は美濃入道に征服された恨みを決して忘れてはおられまい。その気があらば、岩附を取り戻す手助けがしたい」

氏綱の人泣かせな調略は、不思議と効き目を発揮した。

まず洪江三郎がこれに同意した。

彼に同意する者も増え、太田勢は獅子身中の虫を孕んだまま、二月六日昼前、北条勢を迎え撃った。

岩附城をめぐる激しい攻城戦は、さすが道灌構築の名城よと氏綱を感嘆しせめた。

しかしこのときから、氏綱には確信があり、太田資頼は安心に溺れていた。夕刻前、洪江三郎をはじめとする背信が突如生じた。一進一退の戦いは、大きくひとつの結末へ流れ出した。

「ここはもはや」

家臣たちに促され、夕闇迫るなか、太田資頼は断腸の思いで、岩附城を放棄せざるを得なかったのである。

「勝鬨ぞ、美濃入道の戦意を奪うがよい」

氏綱の号令で夕刻に染まる朱の空に鬨の声が

溶けていった。

苦々しさを噛み殺して太田資頼が石戸城へ入ったのは、もう日が暮れた頃であった。

資頼は河越の上杉朝興へ援軍を要請すると、ほどなく上州から関東管領・山内上杉憲房の援軍が派遣された。この攻撃を氏綱は凌いだ。
十十十

新たなる敵（1）

夢酔 藤山